

非正規従属な1-ファクターマートンモデルによる 与信ポートフォリオの信用リスク評価

東京理科大学大学院工学研究科 藤井琢也
東京理科大学工学部 塩濱敬之

1 はじめに

構造型信用リスク評価モデルにおける1-ファクターマートンモデルとは、ある企業の資産価値変動の要因を全ての企業に共通する1つのファクターと当該企業に固有のファクターに分け、資産価値がバランスシートの負債額を下回った場合をデフォルトと定義し、デフォルト確率を算出するモデルである[1]。その信用リスク量の計測は、連続時間におけるウィーナー過程に基づいて記述される。本研究は、上記のモデルの離散時間モデルを考え、そのリスク因子に非正規従属性を仮定したモデルを提案し、高次漸近展開を用いた信用リスク量の計測を試みる。

2 非正規従属な1-ファクターマートンモデル

マートンモデルでは、債務者*i*の資産価値は以下の幾何ブラウン運動に従っている。ここでは、同じパラメータ μ, σ, ρ を所有した*N*の債務者から構成される均質なポートフォリオを仮定している[2]。

$$dV_{i,t} = \mu V_{i,t} dt + \sigma V_{i,t} dW_{i,t},$$

ここで、 $V_{i,t}$ は債務者*i*の時点*t*での資産価値、 μ は資産価値の平均収益率、 σ はボラティリティ、 $W_{i,t}$ はブラウン運動である。この $W_{i,t}$ は以下のように2つの独立なブラウン運動に分解される。

$$dW_{i,t} = \sqrt{\rho} dX_{0,t} + \sqrt{1-\rho} dX_{i,t}, \quad i = 1, \dots, N.$$

$X_{0,t}$ と $X_{i,t}$ は互いに独立な標準ブラウン運動に従い、 $X_{0,t}$ は共通ファクター、 $X_{i,t}$ は債務者*i*の固有ファクターである。また、 ρ は資産相関であり $\sqrt{\rho}$ は資産価格の感応度である。確率過程 $V_{i,j}$ を区間 $[0, t]$ において、間隔 Δ で*n*分割した離散観測を考える。このとき、 $V_{i,j\Delta}$ と $W_{i,(j-1)\Delta}$ はそれぞれ以下の式で表現される。

$$\ln V_{i,j\Delta} = \ln V_{i,(j-1)\Delta} + \mu\Delta + \sigma\sqrt{\Delta}W_{i,(j-1)\Delta},$$

$$W_{i,(j-1)\Delta} = \sqrt{\rho}\tilde{X}_{0,(j-1)\Delta} + \sqrt{1-\rho}\tilde{X}_{i,(j-1)\Delta}. \quad (1)$$

ここで、 $\tilde{X}_{i,j} = X_{i,j}/(\text{var}(X_{i,j}))^{\frac{1}{2}}$ は標準化過程である。また、 $X_{i,j}, i \in \{0, 1, \dots, N\}$ は4次定常過程である。式(1)から $t = n\Delta$ のとき、債務者*i*の資産価格は次のように表現される。

$$\ln V_{i,t} = \ln V_{i,0} + \mu n\Delta + \Delta^{\frac{1}{2}}\sigma \left(\sqrt{\rho} \sum_{j=1}^n \tilde{X}_{0,j} + \sqrt{1-\rho} \sum_{j=1}^n \tilde{X}_{i,j} \right).$$

また、 $Y_{0,n} = \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{j=1}^n \tilde{X}_{0,j}, Y_{i,n} = \frac{1}{\sqrt{n}} \sum_{j=1}^n \tilde{X}_{i,j}, W_{i,n} = \sqrt{\rho}Y_{0,n} + \sqrt{1-\rho}Y_{i,n}$ とする。このモデルの下で、信用リスク量の評価を高次漸近展開を用いて行う。

参考文献

- [1] 橋本崇 (2008). 「与信ポートフォリオの信用リスク計量における資産相関について - 本邦のデフォルト実績を用いた実証分析 - 」, 日本銀行ワーキングペーパーシリーズ, No. 08-J-10.
- [2] Hull, J. C (2012). Risk Management and Financial Institutions Third Edition, Wiley, New Jersey.